

3 『太平洋戦争を生きた少女たち』（尚綱卒業生の記録と追想）

少女時代の戦争体験を集めて本を作ろうと、高澤計以さんが言い出したのは『根づいた花』刊行（二〇〇三年）とほぼ同時だった。小野寺正美さん、木村淳子さん他同級生数人も賛成した。ぶつくさ言っていたのは多分、親しい友人の中では私だけだったと思う。できれば忘れてしまいたい体験をわざわざ書いてくれる人が何人いるだろう。原稿が集まったとして、費用をどこから出す？ 売るとは言っても、売れなかつたら赤字と在庫は誰が引き受ける？ 金持ちの同級生など、どこにもいない。しかし、計以さんはびくともしなかつた。彼女は全所持金をはたき、パソコン打ち、友人・昔の先生方への原稿依頼もみな引き受ける覚悟を決めていた。

気がつけば船は港をとくに滑り出し、計以さんのめげることない説得のおかげで、原稿は順調に集まり始めた。書けませんと言われれば、彼女は電話で聞き書きもした。

計以さんには糖尿がある。日中は主婦の家事の他、畑までしていたから、本作りは夜中の仕事。あの一年間、彼女は何時間眠っていたろう。

最後の打ち合わせに、何人が何回集まったかは忘れてしまった。木村淳子さんがおぼえていると思う。十人から二十人もいたか。印刷費・部数・値段・タイトルのこと。記憶にあるのは、きわめて民主主義的にみんなが言いたいことを言い、計以さんはほとんど黙っていたこと。費用は集まった全員が均等に負担することになった。どのぐらいの負担だったかは、実務を担当していた小野寺正美さんがおぼえていてくれるはず。

二〇〇三年十二月、おそろおそろ刷った千部、定価千円は、あつという間に売り切れた。本屋に頼んだわけではなく、関わったみんなが責任感で一生懸命に売ったおかげである。一回増刷した。素人の主婦達の初仕事としては成功だった。一人一人の出資金は戻らなかつたが、赤字は出なかつた。母校と地元の図書館には何冊かずつ寄贈したから、十年以上経った今、読みたい人が出てくると、図書館から借りて下さいと私は言うことにしている。数年後、計以さんは急死した。地味な、口かずの少ない友達だった。熱かった彼女の反戦のこころざしだけが、今も生きている。

二〇一四年二月、用事で上京した私は、久々に天野文子さんに会うことができた。彼女は、南部

バプテスト教会の元牧師夫人で、私達と同年。七十年前に広島で被爆された。東日本大震災のあと
の電話の声が忘れられない。

「福島原発事故のあと、くやしくて辛くて、一ヶ月起き上がれなかったの。行かなければならな
い仕事があつて、ようやく起きたのだけれども……」

本当に辛そうだった。あなたがどうして今度もそんなに辛い思いをしなければならぬの、と心
で思うしかなかった。

食事に座ると、彼女はさつそく十年前の私達の冊子を取り出した。あの時、信者の同窓生が送っ
てあげたものだった。ページをめくりながら文子さんは面識もない一人ひとりの消息をなつかしそ
うに尋ねられる。知る限りを話す。おたがいの現在のことも。別れ際、心をこめて言われた。

「こんなに良い本を、どうしてちゃんとした出版社からお出しにならないの？」

びつくりした。そんなこと考えた人は一人もいない。まして十年以上もたった今、私達はみな
八十代半ば、計以さんももういない。でも同年の文子さんは、今も証言者として求められれば、ど
んな遠方であろうと核の残虐、戦争の悲惨を語り続けて止まない。いつものことで私は恥ずかしかつ
た。原発再稼働反対の票が二つに割れた翌日の東京都知事選についても話す時間は残らないまま、
夕闇にきらめく大都会の灯りをうしろに、私達は別れた。

あの日から私は時々、十年前にみんなで作って一冊だけ残った本を開いてみる。時の権力者、東
條内閣の閣議決定で教室から追い出されたものの、敗戦が早かったため、尚綱（女学校、仙台市）
生徒の私達から、さいわいに死者は出なかった。したが、怒りも弱いのである。とはいえ、私が
住む山形市のすぐそばの山形県立第一高女（現、西高）から神奈川県川崎の工場に動員された生徒
のうち、十人以上が空襲で命をうばわれている。西に向かえば、敗戦目前の八月六日。広島市では
早朝、工場や疎開地跡片づけに向かつて歩いていた中学生・女学生のうち、四千人が原爆死した。
八月九日の長崎市の状況も同じだったと思う。勤労動員中に犠牲となった少年少女の総数は慰霊碑
によれば、一万有余人とのことである。

一方、敗戦当時、日本ではなく異国にあった同窓生の中に、大先輩にあたる小原かつさん、私達
と同年の長池秀子さん、八田さと子さんがいた。計以さんの粘り強い説得で、ついにペンをとった
秀子さんの「いつも神様がご一緒よ」と、さと子さんの「忘れられないこの痛みを」は、二人の切
り抜けた体験のものすごさに圧倒される。

「忘れられないこの痛みを」（八田さと子）より要約（河内）

一九四五年八月、戦争が終結して一時間たたぬうちに、さと子さんの六人家族が住むハルピン

市の街路を、中央に女性兵士の立つ巨大なソ連の戦車が進んできた。その日のうちに日本軍は武装解除され、兵士達は全員ソ連兵に連行された。さと子さんの父は、生きて帰国のすべを失った家族全員の自決を決意する。奥の一室がその場所。タンスが前に出され、わらが積まれる。さと子さんは死にたくなどなかった。

しかしその夜、連行された兵士の一人が脱走してくる。他人を巻き添えにはできない。決行は延期された。翌日は獐猛な顔つきで自動小銃を肩にしたソ連兵三人が入ってきて、手当たり次第の略奪、さらに次の日はソ連の将校が通訳を連れて来て、二時間以内の家を明け渡せと申し渡す。やつと持ち出した荷物も、途中ですべて略奪され、家族は着の身着のままになった。ハルピンは北海道の北端よりさらに北。さと子さん一家はその冬、どのようにして酷寒をしのいだものであったか。各所で日本人が人民裁判と称して市中を引き回されている時、父親を外で働かせることはできなかった。母は病弱。生活は十四歳のさと子さんの肩にかかる。女中にウエートレス、工場の女工と必死に死に物狂いで次から次へと働いた。生活は困窮をきわめた。

「いつも神様がご一緒よ——私の八月十五日前後」（長池秀子）より要約（河内）

同じ頃、やはり十四歳の秀子さんも弟と二人で冬のコート、毛布、食器、目覚まし時計などを背負い、親の一足先に避難所に向かっていた。秀子さんの母が小原かつさんである。

「秀ちゃん、頼みましたよ。行き先は公園の中の兵士ホーム。私も折を見て逃げます。お父さん、あとは頼みます。神様がご一緒ですから」

すでに日は暮れ、外は真つ暗闇。そこに子供達を送り出した母の言葉だった。ガリガリ進んできた戦車から道路脇の草の茂った堀にかくれ、ようやく避難所に見える所に来た時、ついに少女はソ連兵に捕まってしまふ。弟を助けを求めに走らせるが、前からも後ろからも銃口を突きつけられた。銃口を手で引き寄せ「撃ってください」と彼女は二、三度大声で叫ぶ。その時、朝鮮人か中国人の通訳が「歳はいくつですか」と尋ねた。とっさに「十一歳です」と答えた時、一人の大きなソ連兵士が背中を押し、そこから助け出してくれた。その時まで恐怖に震えることはなかった、と秀子さんは書いています。

以下、長池秀子さんの文章を抜き書きする。

兵士ホームで夜が明けるまで父と母を待ちました。でも現れません。目覚まし時計のカチカチがやたら大きく聞こえ、すぐ外では自動小銃のバリバリバリ、バラバラバラと発砲の音が絶えず、誠に不安な一夜を過ごしました。母も家を出たあとは、町内の防空壕で一夜を明かし、母を逃がしたことで父は撃たれることになり、これまた、その寸前に逃げおかせ、夜中の暴徒の中にまぎ

れ、母を助け出して無事私共と合流しました。これが二十六日早朝です。

住宅街を追われた私共は支那街近くの赤レンガ館の旧将校宿舎に一夜を過ごしましたが、ここの夜が一番陰惨で恐ろしい思いを致しました。私共は髪を切り落とししました。階下では引き裂かれるような叫び声は何度も聞こえて、誰かが連れて行かれたものか、引き戻されたものかは全く判りませんでした。(略)

〔悲しみ秘めたひな祭り〕『公守嶺——過ぎ去りし四十年』(満州の学校の仲間との文集)より

敗戦翌年の三月ごろ私の家族は、公守嶺こうしゅれいの藤井菓子店の二階に住んでいた。そのころ、母は満鉄病院で付き添いをしていたTさんのたつての依頼で、ソ連兵の相手をする女性のドレスを何枚か仕立てた。

ある時、この気つぶのよいおばさんが、また訪ねてきた。そして洋服の端切れで細工をしていた私どもに「この服の子が昨夜、ロスケにピストルで殺されてしまった。奥さん！ 本当にかわいそうな娘だよ」と言って泣いた。

その夜、母と私は深い朱に紺で細かな菊が織り込まれているお召しのその布で女雛を、黒ちりめんちりめんで男雛を、他三人官女と五人はやし雛子など十体の小さな雛を作った。翌朝、白菜の芯から育て上げた黄色い菜の花を添えた。この哀しい雛たちを忘れたことはないが、華やかな緋毛せんの上に

飾りきれずに来た。むしろお彼岸に供養してやるべきであったとこの年になって思うこの頃である。(一九七〇年四月)

この中のTさんは天理教の熱心な信者で、自分の郷里に教会を作るためにと、満州まで出稼ぎに来ていた人でした。母が入院した折に世話になり、その後休日にはよく遊びにきていました。私どもの街にソ連兵が入ってきた時、この人はどういうわけか兵士の相手役をする女性たちの母親役を買って出て「お母さん、お母さん」と慕われていたようです。Tさんが我が家にきても、母はいつも忙しく、バザーのための服やエプロン縫いのミシンをガチャガチャ踏んでいたのを見ていて、ドレス仕立てを頼めないかと思いついたようでした。

この時から半世紀以上の年月がたちましたが、この雛を現在も手元に持って居ります。この人達の何人が無事生きて日本に帰されたものか、帰れなかったものか、知るすべはございません。でも、その後の人生が過酷であったことは十分に想像がつかます。ああ、この人たちがいなかったなら、私たちの今は、なかったかもしれない。日本兵士の相手をさせられた女性が、日本の敗戦後、即ソ連兵の相手をさせられた残酷な犠牲を、このやり切れない犠牲の深さを思う時、今なお胸の痛むことしきりです。(後略)

ソ連兵の性暴力はすさまじかった。今も世界に続く戦争犯罪である。秀子さんとさと子さんのペ

ンはどれほど心が重くとも、それらの事実を素通りしていない。短いけれども、さと子さんも書く。貴重なありがたい証言である。

以下は八田さと子さんの文章である。

病弱で働けない母が、「松花江に末の妹と身を……」と考えていたのを知り、頼みに頼んでやっ
とすぐ下の妹と二人、小さな化粧品工場に雇ってもらおう。だが、二カ月で私だけとなり必死に働
いた。

翌年十月帰国となった。その間の生活は書くには余りある。引き上げの葫蘆島港までの悲惨さ、
無蓋車に乗せられ、途中何回となく「女を出せ」とおどされ、その度にいつも身を挺してくれた
のは、年長の職業婦人であった。

戦争の犠牲者は限りなく、限りなく失われて行った。奥地、開拓団の方達の悲惨は言葉を絶す
る。語り伝えることの難しさを思わずにはいられない。

第二次大戦末期の一九四四年、四五年、私達は国家による「学徒勤労動員令」の命じるまま、北
海道から沖繩、満州にまで拡がる地域の中学生、女学生と共通の時間を生きていた。ここに登場し

て頂いたKさん、Gさん、ステイブンスさんと私にかみついたSさんともう一人、日記を残した棟
方郁さん、原稿浄書してくれた嶺岸久子さん、いのちをすり減らして文集を作った高澤計以さん、
十人以上の先生と友達、文集作りを助け、懸命に売ってくれた小野寺正美さん、木村淳子さんと仲
間たち、貴重な証言を書き残した長池秀子さん、八田さと子さんは、小原かつさんを入れても十二
人のお名前しか書けなかった。だが彼女たちの背後には、各学年を合わせると数百人の同級生がい
る。いずれも尚綱らしい、まっすぐで心やさしい生徒達であった。

どの人も八十歳を越した。訃報は引きも切らない。なのに世界も日本も、思いもよらなかった新
しい戦乱の音がする。私達はここまでの時間、何をどう学んだか、残る一日一日をどう生きるか、
この世を去った先輩や友達から何をもらったか、あらためて考えてみたいと思っている。